

チウン ヤオ
瓊 瑤 著

『^{パイ}白 ^{フウ}狐』 (I)

呉 世 煌 訳

第 一 章

「旦那様、あと三里の道のりで、^{チンアン}清安県境に入りますが、駕籠からおりて、暫らくお休みになってはいかがですか？」

老僕^{コージョウ}の葛昇^{カクシヨウ}は驢馬に跨り、葛雲鵬^{カクウンポン}の駕籠先にまわって坐っている雲鵬^{ウンポン}に話しかけた。

「もう夕暮時だなあ？」

雲鵬^{ウンポン}は空を見上げた。両側の簾は上げられて、まわりの景色は一望の下におさめられた。この一行、今、峡谷の道にさしかかり、左を見れば峻険たる断崖絶壁に巨石^{ルイジヨウ}疊壘として偉容を誇り、右は丘陵の起伏が連なって、見渡す限り、天を衝くばかりの蒼松古槐^{ソウシヨウコカイ}に掩われていた。奥深い繁みや山あいにも、空の彼方から暮色がひたひたと迫って来ていた。数条の炊煙が縷^ル縷立ち上るその峡谷の中を、一羽の鶴が孤独な羽搏きで、寂しく飛んで行く。それは異様に荒涼とした、曠野の一景であった。

「もうすぐ暗くなりましょう……松明を点けるよう命じておきましたが、駕籠廻りの提燈にも火をお点けいたしましょうか？」と老僕^{コージョウ}の葛昇^{カクシヨウ}が言った。

「やはり休まずに先を急ぎ、早く^{チンアン}清安県に到着するがよい。うち見たところ、ここら一帯は荒涼としているが、^{チンアン}清安県はどうか？」

「張師爺^{チヤンシーイェ}¹⁾の話では、県城だけは賑やかですが、あとはこのようなものだそうでございます。

訳注1) 旧時、主として地方官署の長官が個人的に招聘し抱えていた居候的な顧問役のことを師爺といった。

雲ユインボン鵬はあたりの、懸崖峭壁けんがいしやうへき、叢林巨木ちやうじやうが重疊ちやうじやうと聳えている様子を、さも困惑気に見渡しながらかねた。

「庶民達はどの様にして暮らしているのかな？」

「旦那様、『山に住めば山を頼りに暮らしを立て、川に住めば川を頼りに生きる』と古来から謂われています」と葛昇コーシヨウの手は駕籠を押さえ、驢馬を進めながら答えた。

「うむ」

「ここらは山国ですから、庶民は山で暮らしを立てるのです。張師爺チヤンシーイエの話では、農家よりも狩人が多いとのことでございます」

「なにが狩れるのかな？」

「それは、例えば虎とか熊、貂、鹿など、なんでもございます」

葛雲鵬コーユインボンは、頷いて黙りこんだ。あたりを見て彼は感慨に耽った。昔から謂われている——十年の寒窓人に知られず、一挙に名をなせば天下に知れわたる——この私も一応天下に名をなしたことになる。故郷の郷試²⁾は一番で通り、天子がみずから行われる殿試では栄誉ある進士に合格した。今また翰林院³⁾の歴史編纂の閑職に廻されることなく、すぐ実権のある清安県知事チンアンとして任地に赴任することになったのである。然し多くの人の羨望の的になりながら、彼はその幸運を喜ばなかった。というのは、雲鵬ユインボンは県知事の官位に、あまり興味を抱かなかったからである。実を言えば県知事とは何をよわいするのかも、莫然としていた。齡三十に満たない彼は少年然

訳註2) 科挙すなわち官吏登用試験制度において、三年毎に各省で行なわれた試験が郷試で〔六比〕ともいう。合格者は〔挙人〕の称号が与えられ、〔礼部〕で行なう〔会試〕を受験する資格が与えられる。会試合格者を〔貢士〕と称し、その首席を〔会元〕と呼ぶ。貢士はただちに〔殿試〕を受ける。これは天子が自ら貢士の席次を定める試験で1日で終る。この殿試を経て初めて〔進士〕の称号を受ける。進士の首席3名のうち、その第1位を〔状元〕、第2位を〔榜眼〕、第3位を〔探花〕と別称した。なお、礼部とは旧制六部、つまり中央官署の1つで、儀礼・祭典・学事・試験などのことを司るものであった。

訳註3) 唐時代からある官署であって国史の編修、経書の進講、式文撰定などをつかさどった役所。清制では掌院学士・侍講学士・侍講・修撰・編修・檢討・庶吉士などの役員を置いた。

として、いまだに童心を失わず、それよりも、氣心の合った二・三の知己と山河を遍歴し、詩を誦^{すさ}み、酒を酌み交す人生の方がよほど性分に合っていた。だが、官吏になった今、わがままは許されなかった。雲鵬^{ユインボン}にとってはこんな辺鄙な清安県^{チンアン}に赴任するのは不本意であり、鳥流しにもひとしかった。

いつのまにか、あたりは暗くなっていた。従僕達は松明をかかげ、駕籠まわりの四つの提燈にも火が灯された。一行は山野の中をひたすらに道を急いだ。今夜は十里舗^{シーリーパー}の宿場に泊まる予定である。十里舗^{シーリーパー}は清安県^{チンアン}境より五里先にあるごく小さな町並で、今夜は県内の郷紳や、役所の師爺・吏員・召使たち一同がそこに宴席を設けて、新任の県知事を歓迎する手筈になっていた。

松明^{きら}が煌めき、提燈も風に揺れ動いた。雲鵬^{ユインボン}は無意識に空を見上げた。一つ、二つ、三つ……大空はまたたくまに星でいっぱいになった。今夜の風は強くはないが、その音は異様にひびきわたり、林に、谷に、峭壁に当たって、笛のようにヒュウヒュウと鳴った。夏なので、風はさほど冷たくなかったが、人肌に触れる感じは無気味であり、月の光に照らされた山や木の影が、斜めに大きく地面に写し出されていた。その獐^{どうもう}猛なかたちは、雲鵬^{ユインボン}を不安に陥し入れた。……こういう深山で強盗や匪賊に出逢わないとも限らず、万が一、赴任の当日にそのような目に遭いでもしたら不名誉至極である。いや、強盗匪賊はまだしも、もし魑魅魍魎^{ちみもうりょう}に逢えばどうしたら良いか？……雲鵬^{ユインボン}はこの一帯が鬼狐の伝説の最も多いことも知っていた。

妄想に耽^{さなか}っている最中、突然行列が停まった。パンパンパンパンと火薬の炸裂する音と共に、閃光があたりを明るく映しだした。雲鵬^{ユインボン}はハッと、もしや盗賊が現われたのではあるまいかと疑っているところへ、葛昇^{コーション}が藍馬に鞭を当て、にこにこしながら、やって来た。

「旦那様、もう清安県^{チンアン}境に入りましたので、爆竹を鳴らさせました。十里舗^{シーリーパー}の町はもうすぐでございます」

雲鵬^{ユインボン}は胸を撫で下し、一行はなおも道を急いだ。駕籠かきは草鞋ばき

で、石畳の山路をつつ走った。螢が数匹草むらや崖下を飛び交い、荒涼たる山野に一点の彩りをそえた。駕籠の中で体を斜めにしていた彼は柔い錦欄緞子に坐りながらも、なお、足が痺れるのだった。風は山野を吹き抜け、簾がはたはたと鳴り、提燈がゆらめいた。その時、虫の鳴き声はたと止まり、あたりは静寂につつまれた。雲鵬^{ユインボン}はふと『前に古人にまみえず、後に来る者なし、天地の悠々を想えば、独り愴然として涙ぐむ』の想いに浸った。

彼はしばし仮寝に入っていたが、突然、^{かし}喧ましい人声に驚いて目をさました。居ずまいを正した彼は、駕籠が停められているのに気づき、十里舖^{シーリ プー}の町に到着したのかと思って外を見やれば、まだ山野の中であった。あたりは風をも欺くような松明が灯され、叫び声、罵り声で騒然としていた。

「どうしたのだ？葛昇^{ゴシヨウ}！」

葛雲鵬^{ゴユインボン}は駕籠前の垂れを押しやり、一步外へ踏み出した。

葛昇^{ゴシヨウ}は急いで走り寄り、

「旦那様、びっくりなさいませぬように、獵人達でございます」と知らせた。

「彼等はどうして、行く手を阻んだのか？」

「いいえ、違います。一匹の狐を追ってこの街道にやって来て、只今捕えたところでございます」

「捕えたのか？それではひとつ見て参るとしよう」

雲鵬^{ユインボン}は好奇心から、一群の松明を持った獵師達に歩み寄った。獵師達は雲鵬^{ユインボン}が新任の県知事であるのを知って道に跪き、一斉に丁重な挨拶をした。彼は興味を持ってこれから治める住民達を観察した。松明の光りに、照らし出された彼等の顔は赭く日焼けし、眼は^{けいけい}爛々として、腰に毛皮を巻き付け、肩には弓矢を背負って、一人一人がみな魁偉な体格で、偉風堂々としていた。ふと気が付くと馥郁^{ふくいく}として濃厚な佳釀^{かじょう}の香りが、あたりに漂よっていた。つぶさに観察してみると彼等のほとんどが、腰に酒を入れた葫蘆^{ふくべ}を下げていた。

群衆のあけた道に一步踏み入った雲鵬^{ユインボン}は、すぐ狐が一匹、細縄で、が

んじがらめに縛られているのが眼に入った。それは雪をも欺くばかりに白く、ふさふさとした毛で全身をつつんだ白狐であった。明らかに長時間、獵師達の追跡を遁れて苦闘した形跡が見られた。今は全く観念した様子であるが、漏れる息遣いはまだ激しかった。四肢を縛られ、路上にころがされた白狐は美しい首を心持ちもたげ、じっと雲鵬^{ユインボン}を見上げた。その黒々としたつぶらな瞳は、畜生ながらも何事をも知り尽し、訴えるようにも、祈るようにも見えた。

歩み寄った雲鵬^{ユインボン}はしゃがみ込み、仔細にこの動物を観察した。『狐』今迄無数に見てきたが、これほどに全身純白なものはない。艶を帯び、ふさふさとした毛並は美しく生えそろっていた。それはまさに一点の非のうちどころもない完成された芸術品であった。

不安気に大きな尾を振る白狐に、雲鵬^{ユインボン}はじっと讚美の眼で見入った。白狐は体を動かし低く呻いた。その黒くつぶらな瞳は、松明の明りの下で瞬きもせず彼を見つめていた。その眼は深く、黒く、助けを求める哀願の凝視であり、まさしく『人間』の眼であった。彼の心は動かされ、猛然として憐憫の情がわいた。

突然群衆がどつとどよめき、入り乱れて後退った。あたかも、この白狐の魔法にかかったかのように……雲鵬^{ユインボン}はどうしたことかと、再び白狐を見ると、まなじりから涙が溢れていたのである。

獵師の一人が弓を構え、白狐にねらいを定めているのを見た雲鵬^{ユインボン}は、急いで一喝した。張師爺^{チヤンシーイエ}は雲鵬^{ユインボン}に言った。

「獵人達は迷信深く、白狐は不吉な畜生だ。殺さなければ不可ない。と口々に言っています」

「待てっ！」

彼は皆の方にふり向き

「お前達は普段狐を捕えたらどう仕末するのか？ 殺すのか？」と聞いた。

「はい。旦那様」

「肉は食べられるのか？」

「旦那様、私達が欲しいのはその毛皮だけです。ことにこの白狐は値うちがあります」

「白狐は沢山いるのか？」

「いいえ旦那様、珍しゅうございます。今までにも白狐は居りましたが、かように純白なものはございませんでした」

「この毛皮はどれほどの値うちがあるのか？」

「十両ほどにはなりましょう。旦那様」

「葛昇コーシヨウ、雲鵬ウンボンは老僕を呼び、

「銀子ぎんすを十五両持って来なさい」と命じるとともに、獵師の一人に向って尋ねた。

「わしが十五両でこの白狐を買いたいけどどうだ。売ってくれるか？」

その獵師はさっと地面に跪き、頭を下げた。

「旦那様、どうぞそのままお持ち帰り下さい。銀子をいただくなどは恐れ多いことでございます」

「なにを言う、」

彼はその獵師の肩を叩きながら。

「お金をとらないでどうして生活するのか？葛昇コーシヨウ、彼等に銀子を与えよ」とくり返して言った。

彼等はただひたすら恐縮し、ぺこぺこと頭を下げるばかりであった。雲鵬ウンボンは微笑を禁じ得なかった。剛直で忠誠な住民を治めることになるのを知った彼は、この辺鄙な清安県キョウアンを愛し始めたのだった。葛昇コーシヨウは手に銀子を持ち、主人の顔色を伺いながら狩人達に大声で言った。

「さあ、旦那様がこの銀子を下さると言っておられる、有難くお受けしなさい。良くお礼を申し上げるのだぞ、」

戦々競々としている彼等は地面に跪き、一斉にこの慈悲深い新任の知事に感謝した。雲鵬ウンボンは心から嬉しそうに、にこにこして白狐を見た。

「それでは、この白狐は、もうわしのものだな？」と言い、白狐の頭やその柔らかく美しい白毛を慈しみながら、こうつぶやいた。「白狐よ、そちは今の世に又とない美しさを持って生まれて来たのだ、今日からは自分を

大事にして、あの広々とした原野や涯しない森林の中で生き延びて行くがよい。もう二度と捕えられないように注意するのだぞ！」

立ち上った彼は、獵師達に向って、

「さあ、縄をほどいて放してやりなさい！」と命じた。

ほどかれた白狐は、むっくり立ち上りざま、身体をぶるっと顫るわせると、ぐっと首をもたげて、星空の下に、つつ立った。全身雪をも欺くばかりの白い毛、星のようにキラキラと光る眼差——自ずから備わった威厳があたりを圧して、一層きらびやかにその姿を際立たせていた。

「なんと美しい畜生じゃ！」と彼は讚美を新たにし、手を振りつつ、

「もうよい、駕籠を！」とふり向き、再び駕籠に乗った。そして、簾を上げ獵師達に別れの手をふった。

駕籠が上げられる瞬間、白狐は突然先に廻り、行く手を阻んだ。駕籠かきはびっくりして歩みを止め、白狐を見つめた。雲鵬^{ユインボン}は不可解に思い、くだんの白狐を見れば、首を下げ、しっぽを垂れ、低く柔らかく、ごろごろと訴える様に喉を鳴らして、いかにも感謝の意を露わに言えないもどかしさを物語っている様だった。それから、おもむろに、駕籠の周囲をゆっくりと荘厳なあしどりで三回廻った。荒野での白狐のこの行動は奇異でもあり、神秘でもあった。駕籠先で歩みを停めた白狐は低く頷き、やがて頭をもたげ、一声短く呻くと、尾を振り、一陣の旋風の如く路傍の林の中に消え去った。正に一瞬のうちにその白い姿は消失したのであった。「君子生を好む徳あり。元気な白狐よ」と雲鵬^{ユインボン}は心から思った。

一行は又暗夜の山路を目的地に向って急いだ。風は冷たく清々^{すがすが}しく、空に掛った星や月は朦朧とした風情を湛えていた。遙か彼方に十里舖^{シーリープー}の灯火がうっすらと見え始めた。

第二章

夏の昼下がりに、いつでも倦怠感と無聊感に襲われる。雲鵬^{ユインボン}は手に元曲⁴⁾を一冊、紐解いていたが、散漫とした気分で専心できなかった。か

訳註4) 元時代に起こった戯曲のこと。また北曲という。

たわらに侍っている小書僮^{シイアル}⁵⁾の喜児は、団扇で彼に涼風を送っていた。赴任してから早、半月もたち、彼はことの外この小地方が気に入った。住民達は安居楽業して不平を知らず、民風は恬淡^{てんたん}純朴であった。紛争や喧嘩も少なかった。半月来県知事としての仕事は家庭紛争を一・二件解決したのみである。それは閑かであり、居心地も良かった。

この県城⁶⁾は、楊家集^{ヤンチヤーチー}と呼ばれた。なぜ楊家集^{ヤンチヤーチー}と名づけられたかは、さだかでない。事実上この県城に楊の苗字を持つ者は他の如何なる苗字を持つ人達より少なかった。恐らく当初ここに市が立った為、集と名がついたものと思われる。今では千戸以上の人達が住む所となり、毛皮の集散地としても一応名が通っているのであった。毛皮が多く獲る^{とれ}為、よそから来た商人、行商人も多くそれ故に多くの飯屋、酒屋、旅籠が必要に應じて出来、更に旅廻りの劇団、奇術師、猿廻し、武術で客を集める膏藥売り……もここに集まり、楊家集^{ヤンチヤーチー}は雲鵬^{ユインボン}が想像した以上に賑やかな町であった。

県衙⁷⁾は町の中心地に位置し、前に大きい広場があり、建物はその偉容を誇っていた。出入りの正門には一對の石で彫刻した獅子が置かれ、左右を厳然として守っていた。知事官邸はその裏側にあり、雲鵬^{ユインボン}はその便利さに喜んだ。官邸は県城内で、最も立派な邸宅で、前後三棟よりなるこの豪邸は部屋が幾十となくあり、画棟彫梁の巨宅に加えて大庭園は贅美を尽したものであった。

雲鵬^{ユインボン}は家族を既に故郷から呼び寄せていた。夫人の名は弄玉^{ノンユイ}と言って、非常に雅びやかで美しく、物腰のおっとりとした賢夫人であった。雲鵬^{ユインボン}の充ち足りた心境に、ただ一つ不足があった。弄玉夫人^{ノンユイ}が生んだ二人の子供が共に女兒である事だった。秋児^{チイウアル}は八歳、冬児^{トンアル}は六歳、それからずっと身籠っていないのである。膝下に男の子がないのを、誰よりも弄玉夫人^{ノンユイ}

訳註5) 旧時大家の広間で雑用をうけたまわった少年の召使い、或は読書人についている召使いの少年。

訳註6) 県庁所在地のこと。

訳註7) 県庁のこと。

が氣に病み、いつも夫の雲鵬ユインボンに妾を娶る様勧めるのであったが、雲鵬ユインボンはいつもかたくなに斥けるのだった。彼はいつも、口癖のように言っていた。

……子宝は天からの授かりもので、運命には抗し難い。それよりも夫婦間の愛情がもっとも大切だ。私達夫婦は見も知らず、媒妁の言、父母の命に従って結ばれた仲だ。これだけ愛情がこまやかなのを感謝しなければいけない。男の子欲しさに妾を娶とるのは、妾を子を生む道具と見なすにひとしく、そのような人格を無視したやりかたを私はしたくない……と。

その意見を聞いた弄玉夫人ノンユイは、『愛情』あらば妾を娶ってもよいと思い、幾度か水をもしたたる様な美しい召使ユインボンいを買入れ、わざと夫の身の廻りにかしづかせた。だが雲鵬ユインボンは心を動かされず、かえって夫人のもとに追ひ払うのであった。彼は小書僮シイアル、喜児の方がよいと思っていた。これには弄玉夫人ノンユイもほとほと手を焼いたが、如何いともしがたかった。陰で召使達ユインボンは雲鵬ユインボンのことをひそかに、『鉄石の旦那様』と呼んだ……それは旦那様に鉄石の如く強い決意と固い意志があり、たとえ沈魚落雁⁸⁾ 又は傾城の美女であっても惑わされる事がなかったからだ……。

今、この『鉄石の旦那様』は書齋に坐り、無聊をかこって、散漫と元曲の本に目を向けていた。

『香夢回、

纓袿紅鴛被、

重點檀唇胭脂膩、

匆匆挽個拋家髻。

這春愁怎替？

……………

香夢よりかえ回りて、

紅鴛こうえんの蒲団よりね袿け出す、

訳註8) 女子の容貌の麗わしい形容：莊子の〔毛嬙麗姬，人之所美也，魚見之深入，鳥見之高飛〕から出たもので、この麗人には鳥や魚までも逃げ出したとの意で、後世美人の形容に用いるようになった。

檀唇^{だんしん}に重ねて胭脂を点け、
 匆匆^{もとどり}に抛家髻⁹⁾を結びたり。
 この春愁を如何にせん？
 ……………』

の下りで、彼は一時、恍惚な想いに耽り、はたと、元曲の書を閉じ、しばし深々と冥想に陥入った。小書僮^{シイアル}、喜児はかたわらで静かに団扇で風を送りつつ、この様子を見ていた。檀香が焚かれた香炉から紫煙がゆらゆらと立ち昇り、その香気は隅なく室中に滲み亘っていた。翠緑の竹簾が低く垂れた窓の外には、緑竹が疎らに植え込まれていた。そこには蝉がミンミン鳴いているのだった。しばし鳴声がやみ、室内がひとときわ静かになった。ところがその時、路傍の窓から、ゆったりとした抑揚のある柔らかみを帯びた女の歌声が聞こえてきた。雲鵬^{ユインボン}はハッと、身を動かし、その凄愴なる歌声に聞き惚れた。

『万里羈魂招不返，
 空落得淚沾巾，
 念骨肉顛連無告，
 只得將薄奠來陳，
 酌椒觴把哀情少伸，
 望尊魂來享殷勤！
 ……………

万里の彼方にとらわれし魂よ！招いても返らじ、
 ただ涙落ちて、巾を濡らすのみ。
 孤児落魄し、助け人なきところに免じ、
 もって、ここに粗奠を呈す。
 椒酒^{しよくしゆ}の杯^{さかづき}大地に流し、しばし哀悼の想いを捧ぐ、
 願わくば魂よ！来たりて子の殷勤を受けよ！
 ……………』

訳註9) 本取りの意。髪の毛を頭の頂に集めて束ねたもの。たぶさともいう。

それは悲しみを含み、涙を帯びたものであった。むせぶような、訴えるような、その悲哀声涙共にくだる切々たる歌声に混じって、騒然とした人声、嘆息も聞かれた。雲鵬^{ユインボン}は思わず身を正し、

「喜児^{シイアル}よ、葛昇^{コーション}を呼び、外の様子を見て来なさい。誰がこんな悲惨な曲を歌っているのか？何か冤情^{えん}があるのではないか？」と言った。

喜児^{シイアル}が去った後、雲鵬^{ユインボン}はじっとそこに坐っていた。断続した歌声に聞きいる彼は、一層感動を深く面にあらわした。歌姫が曲を誦^すむのは珍しくはないが、歌の詞^{ことば}がこれだけ優雅で、哀愁の情ひしひしと迫るのは稀である。

暫らくして、葛昇^{コーション}と喜児^{シイアル}が戻ってきて、老僕が頭を下げて報告した。

「旦那様、年端^はもゆかぬ旅の歌姫でございます。父親が旅先にて病で亡くなり、それを葬う錢もない為、娘は身を売って父親を埋葬するのだそうです」

「そうであったか！」

雲鵬^{ユインボン}は想いに耽り、歌声も又間断なく漂よい入り、一段と悲哀に充ち溢れてきた。

『家迢迢兮在天之一方，

悲淪落兮傷中腸，

流浪天涯兮涉風霜，

哀親人兮不久長！

.....

家迢迢^{いえちようちよう}として、空の彼方にあり、

淪落の悲しみは、断腸の想い、

天涯流浪して、風霜を涉り、

哀しむらくは親人よ、何故に命^{いのち}ながらえざりしや！

.....』

雲鵬^{ユインボン}は眉を寄せ、顔をもたげ、葛昇^{コーション}を見詰めながら問いかけた。

「錢を与えた者はいるのか？」

「旦那様、見物人は多うございますが、銭を与える者は少のうございます」

^{ユインボン}雲 鵬は感情を露にし、頷いた。

「^{コニシヨシ}葛 昇ノ その娘を連れて来なさい。尋ねたい事がある」

いいつけに従い、老僕は出て行き、しばらくたって戻ってきた。

「旦那様、歌唱いの娘を連れて参りました」

顔を上げた^{ユインボン}雲 鵬は、思わず眼を輝かした。いたいけな少女一人が軽やかに、ゆっくり歩いて来たのである。喪服で身を固めた彼女は、頭から爪先までただ一色、〴〵白〴〵であった。白い衣裳、白い帯、白い緞子の靴、それに髪にはなにも飾りをつけず、わずか耳たぶに白い小花を一輪挿しているのみだった。この一身の〴〵白〴〵が突然^{ユインボン}雲 鵬の心を動揺させた。彼はすぐ、この雑念をふり払った。……当然ではないかノ父を喪ったばかりの娘に、全身真白の衣裳以外に着るものがあるとでも言うのか？……少女はうつむき、彼の目に写ったのは、ただこじんまりとした可愛らしい鼻先と扇を広げたように長く整った両の睫毛だけであった。作法通り、恭しく地に跪いて、頭を下げた彼女は、明晰なことばに、悠揚迫らぬ物腰で言い出した。

「わたくし、^{バイインシオアン}白 吟 霜、県知事様にごあいさつ申し上げます」

「あいさつはもうよい。して^{クニニヤン}姑 娘、そなたの名は？」

「^{バイ}苗字は白で名は^{インシオアン}吟 霜と申し、詩吟の吟に、氷霜の霜でございます」

「いい名だノ」とつぶやく様に言い、続いて

「おもてを上げよノ」と言った。

^{バイインシオアン}白 吟 霜は命に従い顔を上げた。寒星のきらめくが如く二条の光りが^{ユインボン}雲 鵬を見つめ、そのつぶらな瞳は深く、黒く、透き通るようであった。その充ち溢れる痛ましき、悲しき、助けを求める両の眼に見覚えがあったノこんな楚々可憐な女性に、心を乱されずにいられようか？^{ユインボン}雲 鵬は彼女の視線を外そうと努力した。彼は注意深く彼女の美しさを見詰めた。脂粉を施ささなくても肌は凝脂のように、こまやかで白く、唇に紅をささず、眉もひかないのが、尚一層その秀麗さを引立たせていた。

——^{バイインシオアン}白吟霜，いい名だ！その名に恥じない清純さと雅びやかさがある！——

「して、そちの父親は亡くなられたのか？」と痛ましげに尋ねた。

「もしこのわしが銀子を与え、そちに父親を埋葬させたら？」

「私は喜んで^{ぬひ}奴婢になり、^{インシオアン}粉骨碎身をも願いません！」と吟霜は又も跪いた。

「あわてなくともよい！」

^{ユインボン}雲鵬は手をふり、続けて言った。

「わしが尋ねたいのは、そちに帰る故郷があるのか？故郷の家に誰か肉親でもまだいるのかどうかだ」

^{インシオアン}吟霜は愕然として顔を上げて答えた。

「旦那様に申し上げます。私めの母親は早くから逝き、故郷には六親¹⁰⁾皆無でございます。私は長年父親と諸国を流浪し、故郷とはもう音信が途絶えてございます。幸いに父親の弔いをとどこおりなくすますことが出来ましたら、何卒この邸に留まらせて下さい。喜んで奥様やお嬢様の下に侍らせて頂きます。どうかお願い申しあげます！」

^{ユンゴン}雲鵬はその楚々として可憐な美しい姿を見詰め、しばし思いに耽った後でこう言った。

「わしは先程、そなたの歌を聞いたが、誰から教わったのじゃ？」

「父でございます」

「そなたの父親は、生涯歌で生活を立てていたのか？」

「いいえ、父は士族の出で、四書五経を通読し、ことに音律に優れていました。ただ、門戸凋落し、赤貧洗うが如き有様で、父は秀才¹¹⁾でしたが、悲しい事に郷試に幾度も失敗の果て仕官の道をあきらめました。母が亡くなった後、この私を連れて流浪の旅が始まったのでございます」

^{ユインボン}雲鵬は頷きながら聞いていたが……聞き知る所、^{インシオアン}吟霜は良家の出で

訳註10) 父・母・兄・弟・妻・子のこと。

訳註11) 宋代では科挙受験者を皆秀才と称したが、明・清時代では県学に入学した生員をいった。

ある。ただ、運が彼女に与しなかつただけだ。憐れな境遇だわい……と思った。ふりかえって喜シイアル見アルに命じた。

「喜シイアル見アルよ、この白シイアル姑アル娘アルを連れて奥様のところへ挨拶に行き、そちらに置いてはどうかとお伺いしなさい」

「ありがとうございます、旦那様、この大恩は一生忘れません！」

吟インシヨフ霜フは地にうつ伏せて感謝の意を表わし、身をおこした時は眼にいっぱい涙をうかべていた。彼女が部屋から退った後、雲ユインボン鵬ボンは老僕ユージョフの葛コ昇シヨフが物言いたげに落着きなく彼を見ているのに気付き、

「葛ユージョフ昇シヨフ、なにか言いたい事でもあるのか？」と聞いた。

「はい、でも……」

「なにがでも……だ。話があれば遠慮なくはっきり言うがよい。ぐずぐずしている所を見ると、白シイアル姑アル娘アルをこの邸テイに置くのに賛成ではないのかね？」

「いいえ違います」

葛ユージョフ昇シヨフは声を低くして、

「旦那様にはあの白シイアル姑アル娘アルが尋常でないのに気付かれてはおられませぬか？」と言った。

雲ユインボン鵬ボンは眉をひそめて

「それはどういう事だ？」と問い返した。

一層声を低めて老僕は言った。

「旦那様は『白狐報恩』の物語りをお聞きおよびではございませぬか？」

「それがどうした？」

雲ユインボン鵬ボンはかすかに不安になり老僕を叱責した。

「それは根も葉もない、語り伝えにすぎまい！」

「けれどもあの白シイアル姑アル娘アルの目つきは旦那様がお助けになった白狐によく似ています。しかも苗字は白バイ、あまりにも偶然すぎませんか？私めが見たところ、白シイアル姑アル娘アルはこの葛コ家カに幸せをもたらしますよ」

「戯言を！迷信も程々にしなさい！」

心の動揺を老僕サトに覺ユインボンられまいと雲ユインボン鵬ボンは叱りつつ内庭の窓辺に歩みよっ

た。この時、弄玉夫人ノンユイの侍婢こしもと、採蓮ツアイリエンが喜び勇んでこちらに馳けてくるのが眼についた。

「旦那様、奥様は一目で白姑バイクーニヤン娘を大変お気に召し、もう誰がなんと言っても金輪際手放さないと申しておられます」

彼は冥想に耽った。……先刻の出来事、老僕の話、又半月前暗夜の荒野で見かけた白狐……それらが走馬燈のように脳裡をかすめた。突然彼の目の前に白吟霜バイインシオアンのあの黒いつぶらな瞳が大きく浮んだ。

第三章

ここに、白吟霜バイインシオアンの葛家コーでの波瀾万丈の生活が始まった。
雲鵬ユインボンは士族出である吟霜インシオアンに、痛く同情し、召使いとして遇しなかった。しかも弄玉夫人ノンユイに気に入られ、寵愛を一身に集めていたため、おのずと地位が高まり、彼女は『白姑バイクーニヤン娘』と尊称で呼ばれ皆から敬愛された。弄玉夫人ノンユイより室を幾つかあてがわれ、二人もの召使いが侍らされた。こうして、彼女の厳然たる半主半客のお嬢様生活が始まったのだった。ふだんは秋児チウワアル・冬児トンアルの勉強を見たり、弄玉夫人ノンユイと一緒に針仕事に精を出したり、偶には席前はに側ユインボンべり、歌を唱い、この上なく雲鵬ユインボンを喜ばせた。
葛家コーの下僕、侍婢、召使達に至っては、吟霜インシオアンが来てこのかた『白狐報恩』の物語りを愈々盛んに話し合った。もともと雲鵬ユインボンが荒野で白狐を救った出来事は清安県全境に亘って語り草ケンアンになっていた。それに白吟霜バイインシオアンはいつ見ても白一色で統一された衣裳を身にまとい、軽やかな物腰で音もたてずに歩くので、老僕葛昇コーシヨウをはじめ、あの白狐を目の当りに見た人々は、そうに違いないと太鼓判を押した。

それで吟霜インシオアンが白狐の『変化』だ、と云う事が確乎不変の事実の様になった。

召使達は前々から『鬼狐』に対し畏敬の念を抱いていた。その為彼等は吟霜インシオアンを『畏怖』し且『敬愛』した。何か災難や難題に遭うと、吟霜インシオアンの所へ馳けつけ、解決して貰うのだった。彼等は裏では吟霜インシオアンを白狐の化身ときめつけていたが、面と向ってはおくびにも出さなかった。

吟霜インシオアン自身は皆が闘わせている議論をよく知っていながら、素知らぬふりをした。しかも、これら一連の出来事がまったくなかったかの様に……
 彼女は恬淡とした波瀾のない日々を過した。雲鵬ユインボン夫婦には謙恭かつ礼でもって応じ、秋児チウワアル・冬児トンアルに対しては愛護の限りを尽した。だが『白狐』の噂が跡を絶たず、ある日とうとう弄玉夫人ノンユイの耳に迄その噂が入った。夫人はにこやかに雲鵬ユインボンに向かってこう言った。

「旦那様、古来から『狐妾』の伝説が少なからず記されていますけれど、存じておられますか？」

「冗談を言うものではない！」

雲鵬ユインボンは気色ばんで言った。

「第一、吟霜インシオアンは人間であり、狐ではない。又わしが吟霜インシオアンをこの家に留めおいたのは、あれに帰る家がないからだ。もしわしがあれに邪念を抱き『妾』にでもしたら、それこそ『人の弱味につけ込む』小人になり下がる。もともとわしにはそんな不埒な企みは毛頭持ってはいない。ただゆっくりと適当な相手を物色して嫁がせ、嫁入道具一式でも整えてやって、幸福な日を過ごさせたいだけのことだ！」

「嫁入り相手を捜すのは、ゆっくりでいいんでしょう？…だって吟霜インシオアンは一生私達と一緒に暮すと、口癖のように、いつも言っているんですもの」

「あれがそんな馬鹿気た事を言ったのか？」

「それはあたりまえですわ。あれの命はあなたが助けたのですもの！」

「お前、あれが狐だと本当に信じているのかね？」と雲鵬ユインボンはいらだたしげに聞いた。

「それは狐であって貰いたいわ」

弄玉夫人ノンユイは笑み崩れる様に答えた。

「どうしてだね？」

「もし、あれが本当に、あなたに恩返しをするのでしたら、すぐ男の子を生んでくれるわ」

弄玉夫人ノンユイは含蓄のある笑いで続けて、

「わたしは坊やが狐夫人によって生まれてもかまわないわ！とにかくた

だ早く坊やが欲しいだけなの」とつけ足した。

「世迷い事をぬかす！」

雲ユインボン鵬ノンユイは啞然とし、かすかに苦笑いをせざるを得ず、軽く弄玉夫人をにらんだ。

だが弄玉夫人がこんなに熱心インシオアンに吟霜インシオアンをこの家に引き留めるからには、なにか動機ユインボンか企みがあるのではないかと雲鵬ユインボンは疑わずにはいられなかった。

だが吟霜インシオアンが『人』か？『狐』か？についての判断の問題は別として、その後この葛家コウに幾つかの奇妙な事件が相次いで発生したのだ——。

弄玉夫人ノンユイに香綺シヤンチイと呼ぶ年十五の侍婢ノンユイがあった。気性は純で、姿良く、気転ノンユイがきく為、弄玉夫人から重宝がられ、可愛いがられていた。貴重品は全て香綺シヤンチイが責任を持って預かっていた。

ある日、夫人は翡翠の指輪をつけようとしたが、いくら捜してもなかった。香綺シヤンチイを呼んでも要領を得ず、はては皆で手わけして捜しても無駄であった。香綺シヤンチイは責任の重大さにおびえ、ついに泣き出した。相憎くその指輪は高価な品であったので一騒動起す破目になった。邸内の侍婢、下働き達も自分に嫌疑がかかっては大変ノンユイと慌てだした。その時、下働きの張チヤンばあさんが——個人所有の箱、行李を公開し検分したら？さもなければ疑いがかけられてはたまらない——と言い出したので、皆はそれに賛成し、早速検分が始められた。だがいくら捜しても、指輪は現われなかった。ところが事もあろうに香綺シヤンチイの行李の中からくだんの指環を入れる、錦欄でこしらえた入れものが出て来たのだ。もちろん指輪は跡形もなく消え失せていた。彼女はそれを保管する立場にあるばかりでなく、ふだんから特別目に掛けて可愛がっているだけに弄玉夫人は逆上し、柳眉を逆立てて怒った。そこで傍に待る召使達に、縛り上げて鞭打ちするよう命じた。香綺シヤンチイは香綺シヤンチイで無実を主張し泣き叫び、紐で首を吊ると騒ぐさなかに、吟霜インシオアンが飄然と現れた！

香綺シヤンチイはそれに気付き、馳けよって跪くなり、「救命大菩薩」にでも逢ったように泣きながら吟霜インシオアンを拜んだ。

「白^{バイクニヤン} 姑 娘、あなただけがこの私めを助けることができます。どうぞお助け下さい。指輪の行方はあなたなら御存知のはずです！」

事件の顛末を一部始終聞き終ると暫らく考えこんでから、吟^{インシオアン} 霜 は夫人にこう囁やいた。

「香^{ジャンチイ} 綺は無実ですわ、ほんとうに盗んだ人を知りたければ、下働きの張ばあさんを縛り上げて訊いたら判ると思いますわ！」

弄玉夫人は半信半疑で、言われるままに訊問したところ、すぐ事実が判明した。吟^{インシオアン} 霜 の判断した通り張ばあさんが指輪を盗み、香^{ジャンチイ} 綺に責任を転嫁しようと企んだうえ、彼女の行李の中に宝石入れをそっとひそませていたのだった。

このことがあってから、家中一同は吟^{インシオアン} 霜 に対し、尚一層畏敬の念を深める事になった。当然『白狐の化身』が再確認され、夢にも疑われなかった。ことに香^{ジャンチイ} 綺は、彼女を菩薩のように崇拜した。老僕^{ユージョウ} 葛 昇に至っては、背後で召使達一同に

「みな注意しろよ、この家には大仙人が鎮座ましましているのだ！どんな小細工をしても、しょせん大仙人の目は誤魔化されないからな！」と戒めた。

それからは、邸内の召使達は仕事に励み、不祥事がまったく途絶えた。この出来事に雲^{ユインボン} 鵬も驚いて、ひそかに吟^{インシオアン} 霜 を呼んで事のあらましを尋ねた。

「どうして張^{ジャン} ばあさんが指輪を盗んだ事が分ったのかね？」

「そんな事簡単ですわ、旦那様」と吟^{インシオアン} 霜 は笑み崩れた。

「御存知の通り、香^{ジャンチイ} 綺は幼い頃に売られて来てこの邸の侍婢になり、肉親もいません、それに衣食住に何一つ不自由しないのに指輪を盗んで何になりましょう？それに引き替え、張^{ジャン} ばあさんはこちらに移ってからの新入りで、邸外の自宅には息子やお嫁さんがいるので、その者達としめし合せ、持ち出して売り払ったのですわ。私は永い間父と共に流浪の旅を続けて、人を沢山見て参りました。人相を見て、香^{ジャンチイ} 綺は侍婢とは言え、目鼻だち端正で言動も正しゅうございます。それにひきかえ、張^{ジャン} ばあさん

は態度に落着きがなく、眼つきに狡猾さがあり一目で真人間でない事がわかりますわ」

「だが、新入りは何人もいるのに、どうして張ばあさんだと断定できたのかね？人相で判ったのか？」

「いいえ、違いますわ」

吟霜^{インシオアン}は笑いながら言った。

「箱と行李を検分しようと言いだしたのが張ばあさんでしょう、私には結果がどうなるのか、あの人は始めから知っているような気がしましたの」

そして彼女は恥かしそうにこう言い足した。

「だって、そうでしょう。この場合、『勘』を働かせないと！」

雲鵬^{ユインボン}は彼女を見詰めてこう言った。

「わしの見たところ、そなたの『勘』は実によく当る。そのうち裁判沙汰で難題に出あったら、わしも一つそなたのその『勘』を借りなくてはなるまい！」

それから間もなく、雲鵬^{ユインボン}は吟霜^{インシオアン}の『勘』を借りて、ある家庭騒動を見事解決したのである。

この事件は表面上、非常に単純で、犯罪の動機や事実もはっきりとしていた。もしも雲鵬^{ユインボン}の細心に加えて吟霜^{インシオアン}の『勘』がなかったら、或はこの事件の真相は永遠に洗い出されず『冤罪』を招く事となったであろう。

事件のあらまはこうであった。楊家集^{ヤンチャーチー}に毛皮問屋があった。店主の名は、朱実甫^{チュウウシーフー}。長年惨澹たる苦心の経営の末、巨万の富を築きあげ、正室孔氏^{ユン}¹²⁾との間に、今年十二になる男子をもうけ、その名を興兒^{シンアル}と言った。一粒種であるがため朱実甫^{チュウウシーフー}は眼に入れても痛くないような可愛がりようであった。家の中は波風もなく、平和で幸福な日々が続いた。ところが今年^{チュウウシーフー}の始め、朱実甫^{チュウウシーフー}が妾の陳氏^{チエン}を娶った。年齢は十八。中年になって妾^{よわい}を初めて娶った上に、陳氏^{チエン}が若く艶やかであったので当然寵愛がその一身に集まった。間もなく陳氏^{チエン}は身籠ったため太平の夢は破れ去ったのであ

訳註12) 中国では他家に嫁いでも、生家の姓を名のり〇〇氏と称する。

る。陳氏が正室の出生である興児を妬んでのことか——興児はいつも泣きながら父のところへ訴えに行った。身体には傷痕がなまなましく、聞いて見れば妾の陳氏のしわざであるとのことであつた。朱 実甫は内心不愉快に思っていたが、ただ陳氏を溺愛する余り、深く究明しようとはしなかつた。ここで又事件が発生した。

ある日の午後、興児はお腹をすかせ、おやつが欲しいとねだつた。正室の孔氏は台所で『合子』をつくって食べさせた。ちょうど陳氏もそこに居合せていた。『合子』とは華北の麵粉食の一種で、二枚の小麦粉で作った皮に、蕪と豚肉を和えたものをはさんだ餅の一種である。興児が半分ほど食べた時、突然舌先に、なにかが、チクリとささつた。吐き出して見ると、針が一本蕪の中に埋められていた。興児は泣きながら父親のところへ走って行き事の次第を告げた。朱 実甫が調べたところ、妾の陳氏も台所で手伝つたことが判り激怒した。そこで陳氏を縛り、県衙に訴え出たのであつた。

雲 鵬は妾の陳氏を仔細に観察した。容姿は美しく、実直そうで狡猾な婦人には見えなかつた。訊問するとただ涙を流し、

「県知事様／私は無実でございます」と弁解するだけだつた。雲 鵬にも腹におちないところがあつた。側室が正室の子を謀殺するのはありうることだが、ただ食物に針を入れるのはいかにも幼稚すぎ、馬鹿氣ているように思えた。だが田舎者の女なのでその可能性もないではなかつた。そこで正室の孔氏を訊問したが、これも、朴訥な婦人で、白州にひきたてられると蒼ざめて恐れ戦き、ただ黙って頭をさげるばかりであつた。

再び陳氏に正室の平素の言動について尋ねると、口を極めてほめ讃え、正室も陳氏はふだん出すぎた点もなく、万事控え目で、好きだと肯定する始末であつた。

これには雲 鵬もほとんど手を焼き、処分の仕様に迷つた。犯罪の動機や事実が鮮明すぎるため、いまや陳氏は処罪を免がれないかに見えた。

邸に帰つた雲 鵬はふと吟 霜と相談してはと思ひ立ち、呼びよせて事の顛末を語つた。

「そなたの『推理』では、罪は陳氏チエンにある事になるかね？」

しばし冥想に耽ってから吟霜インシオアンは答えた。

「この事件にはちょうど反対の可能性が有りますわ。だって私達は側妻が本妻の子を嫉むとばかり考えているんですもの……どうして本妻が側妻のこれから生まれてくる子を妬むこともあることに気がつかないのでしょうか？ 陳氏チエンは且那様の寵愛を一身に集めていますし、今また身籠ったのですから、もし男の子を生んだら一層可愛いがられますわ。或は本妻がそれを妬んで、陥し入れようと謀ったのではないのでしょうか？」

「だが正室の人柄は正直そうに見えるし。ではそなたに彼等の人相を見て貰うことにしようか？」

「且那様」と吟霜インシオアンは笑いながら言った。

「昔から『立派なお役人でも家の中のことはさばきにくい』と申しますね」それでは私がひとつためして見ましょう。明日私がお役所で簾ごしに様子を見ますから、もう一度皆を呼んで下さいませ」

翌日、事件の関係者一同が集まって、再び審問が始まった。当然吟霜インシオアンもそれに加わった。終って後、吟霜インシオアンは言った。

「且那様、被害者の興児シンアルを呼んでいただけませんかでしょうか。下手人を捕えてお目にかけます！」

雲鵬ユインボンは疑い深く、

「興児が一切を知っているとでも言うのかね？」と問いかけた。

吟霜インシオアンは一切を胸先三寸に納めているといった素振りで答えた。

「且那様は御存知ありませんでしょうか、子供ってとても敏感なものです。ですから誰がほんとうの下手人か興児にはわかっていると思います」

雲鵬ユインボンは早速人を遣り興児シンアルを呼んで来させた。やがて興児は葛昇シンアルに伴なわれ、邸内にやって来た。その子は一見して利発そうで絶えず瞳をかがやかせる好奇心を丸出しにして、あたりを見まわしていた。

「あら、あなたが興児ちゃんね？」と吟霜インシオアンはやさしくにここにこしながら尋ねた。

「はい」

「お父さまもお母さまも興児シンアルちゃんを可愛がって下さるでしょうね？」

「はい」

「では、陳チエンのおばさまは？」

興児シンアルは目を剥き、唇をとがらせて言った。

「おばさまは悪い女！、ぼくを殺そうとしたんだ」

たちまち、吟霜インシオアンの顔からほほえみが消えたかと思うと、怒りを満面に表わしてパン！と机を叩き、声高に次のように言った。

「誰か来て、このずる賢い子を縛って、真赤に焼いた鉄棒を持って来てちょうだい。わたしが、嘘つきのその口を焼きただらせてやります。それでもまだ嘘をつく気なの？」

顔を青ざめびっくりした興児シンアルは、身をもがきながら、

「ごめんなさい！ごめんなさい！もう悪いことはしませんから、どうぞかんべんして下さい！」と叫んだ。

「さあ、正直に言いなさい。身体の傷は自分でつけたのでしょ。それから針も自分で餅ビンの中に入れたのでしょ。白状しなさい！」

「はい、みんな僕が自分でしました」

「誰から教わったの？何故こんな事をしたの？」

「金ばあさんチンなんだ！金ばあさんチンがね、陳おばさんチエンが弟を生んだら、もうお父さんは僕を可愛いがってくれないって言ったんです」

「金ばあさんチンって誰なの？」

「お手伝いのおばあさんのことです」

これで事件はあっけなく片付いた。たまたま金ばあさんと陳チエン氏の侍婢いさかいが諍いさかいで仲違いをしたため、こういう詭計が仕組まれ、この事件の導火線となったのである。真相は母の孔コン氏も全く知る由もなかった。その上、孔コン・陳チエン 両人の互いに見つめ合うその目差は非常にあたたかいものだった。

事件が解決したのち雲鵬ユインボンは吟霜インシオアンに言った。

「こんどの事にはまったく感服した。お前は どうしてあの子が怪しいと思ったのかね？」

「簡単なことですわ、旦那様」と笑みをうかべ続けて言った。

陳氏がほんとうに興児を殺すとしたら、針を使うなんて馬鹿気た事は致しませんもの。あきらかに、誰かが陳氏を陥し入れるためにした仕業としか思えませんですから、陳氏を陥し入れる可能性があるのは孔氏を除くと、興児一人しかいないのではないのでしょうか？」

「ふむ……ふむ……」

雲鵬はさも困惑気に、

「それはお前が大胆に推理を働かせただけではないか？それにしてもわしは今でも納得がいかない。どうして興児だとすぐに判ったのか」と言った。

「旦那様、それはなにかの『ひらめき』とでも申しませうか」と吟霜は答え、嫣然とほほえんだ。

それを見た雲鵬はひとしきり胸のときめくのを覚えた。

これが雲鵬の裁判に吟霜が登場した最初だった。雲鵬はその『ひらめき』と『勘』を縦横に駆使し、名判官の名を欲しいままにした。当然彼女の『勘』はいつでも迅速で的をえたものだった。それに雲鵬は大いに感謝し喜んだ。だが偶には彼の心の片隅で、もしや『白狐の化身』ではないか？と思う時もあった。

光陰矢の如く、またたくまに二年の歳月が流れ去った。さて、吟霜は喪はあけたが、生れついでに白衣好みで、相も変わらず白装束で身を固めていたが、ただ時として襟に一輪の可憐な花を着けることもあり、その艶やかさ雅びやかさは一層彼女の容姿を際立たせるのであった。その『白』がいろいろと憶測を呼び、議論を沸せた。

そして又もや事件が起きた。

その冬は、天候異変で、異常な寒さの中、何日も雪が降り積り、雪融けの頃には、一そう気温が下って、室内にどれほど火を焚いても、その寒さは凌げなかった。その為か上元の節¹³⁾が過ぎて間もない頃に、雲鵬の末

訳註13) 陰曆一月十五日をいう。三元という節日の一つで、この日小豆粥を食べればその年の疫病が避けられるといわれている。なお三元は「上元」のほか「中元」と「下元」がある。

娘の冬児トシアルが病に倒れた。

始めの頃は、子供の事だから正月の御馳走を食べ過ぎた上に、気候が寒かったので、軽い風邪を引いたのかと思い、薬を飲ませれば、すぐにも癒るだろうと、たかをくくっていた。ところがそうこうしているうちに、全身が焼けるような高熱で、食事も全然喉を通らないような状態になった。あらゆる手を尽し、近隣、遠隔の名医を招んで診てもらったが、薬石も効なく、熱は一向に下がる気配を見せなかった。

そこで一家が慌て出したのである。弄玉夫人ノシユイは枕元に付きっきりで看病し、ただ涙を流すばかりだった。冬児トシアルはまたたくまに、見る影もなく瘦せていった。三日後には人事不省で昏睡状態に陥ち入り、もう助からないと家中で囁き交された。

この間、吟霜インシヨアンも不眠不休で看病した。彼女は特にこの冬児トシアルを可愛がっていたので、魂を奪われたように驚き慌てた。その晩、冬児トシアルの病状は更に悪化し、夕暮時迄に三度もひきつけをおこした。雲鵬ユインボンは冬児トシアルが渾身を『蝦』のように折り曲げてうづくまっているさまを見て『こんな幼い子が、人生の享楽も知らないで逝ってしまうのか!』と、病床の我が子を見詰めて涙をこぼし、歎き悲しんだ。

弄玉夫人ノシユイが、病床につきっきりで、冬児トシアルを搔き抱き涙に暮れている室内のこの悲惨な光景を眼にして、吟霜インシヨアンも雨のように涙を流し、一家は正に愁嘆場。その時突然、香綺シヤンキイが吟霜インシヨアンの足下に馳けより、泣きながら差いて言った。

「白姑娘バイターニヤン、どうかお嬢様をお助け下さい。どうぞ助けて差し上げて下さい!あなた様にだけ助けることができるのです!」

この一言で弄玉夫人ノシユイもはっと気付き、日頃は吟霜インシヨアンが白狐の化身であることを深く気に止めていなかったのが、今はの際、母性本能から溺れるものは藁をもつかむの譬え、そこに一縷の望みを見い出した。そこで彼女もすかさず歩み寄って、吟霜インシヨアンの袂にすがり、うわずった声で香綺シヤンキイと共に哀願した。

「そうですとも!吟霜インシヨアン、そなたは冬児トシアルを助けることが出来るはずで

す。どうかそなたの神通力を発揮して、冬児トナルを助けて下さいな！」

吟霜インシオアンは驚きで顔は真青、眼を大きく睜みひらいたままあとずさりして、聞き取れない位の小さな声で口吃どもりながら答えた。

「それは……それは、奥様！なにをおっしゃるのでございますか？」

こうした中で、ただ雲鵬ユインボンだけが冷静さを保てる人であった。……これは吟霜インシオアンに無理難題を押しつけている。彼女は、当然狐の化身ではないはずだ！よしんば白狐の化身であっても、必ずしも起死回生の法力を持っているとは限らない。もし神通力があつたなら、可惜あたら彼女の父親を旅先で淋しく死なせるはずはない……と思い、立ち上ノンユイって弄玉夫人を諫めようとしたが時すでに遅く、もはや弄玉夫人は吟霜インシオアンの前に跪ノンユイいていた。

「吟霜インシオアンよ、どうか雲鵬ユインボンとあたしの顔をたてて、この子を救って下さいな！私は一生を賭けて、このご恩に報インシオアンいます。きっと！吟霜インシオアン！お願い！……」

吟霜インシオアンの顔色は愈々青ざめ、あわてて弄玉夫人の手をとって、ゆさぶりながら、

「奥様！これはどうしたことでしょう？さあ早く、お立ちになって下さい。どうかごかんべんを！」と言った。

「いやです！あなたが助けると約束してくれる迄ノンユイは……」と弄玉夫人は子供が駄々をこねるように、頑くなに聞き入れなかった。

吟霜インシオアンは嘆息するばかりで、施す術もなく、いらだちながら痛々しげな様子で言った。

「奥様！どうぞお立ち上トナルり下さい。今すぐ冬児を診てみますから、でも私にお救けする自信は全くございません！」

「あなたが診て下さるなら、必ず救かります！」

弄玉夫人は急いで起ち上トナルり、冬児から身を離した。

そこで吟霜インシオアンは病床に歩みより、かがみこんで仔細に冬児を診た。手トナルを冬児の額に当てて体温を計ったり、脈を取ったり、それから襟元から手を挿し入れて首に触って確かめたりした。

雲鵬ユインボンは驚異の眼で吟霜インシオアンを見詰めた。本当に彼女は白狐なのか？本当

に瀕死の吾子あこを救けることができるのか？

ほどなく吟霜インシオアンは診断を終えると顔を上げた。その顔色は蒼白で血の気もなく、眼には焦りと緊張みなが漲みなぎっていた。

「私は全力を尽して見ます！」

その声は顫えていた。

「ただ万一、しくじりましたら、何卒お宥し下さい。私は本当に自信がないのでございます」

「あなたが救けて下さるのなら！」

弄玉夫人ノンユイは、ことばを続けた。

「どちらにしてもそのまま死なせるよりはましですわ、そうでしょうか？」

「皆さんは私を信じておまかせ下さいますでしょうか？」

弄玉夫人ノンユイは慌てて、

「信じますわ！」と答えるのだった。

吟霜インシオアンは大きく頷き、決心が着いたかのように力強く言った。

「では、皆さん！この部屋から全部出て行って下さい。このお子さんを預かります。治療は今夜一杯かかります！それからお台所をあずかるおばさんにそう言って一晩中お湯を沸かしてこの部屋に持って来させるようにして下さい。多し程よろしゅうございます。香綺シヤンチイはここに残って手伝って下さい！では早くお湯を沸かして下さい」

吟霜インシオアンはふり返り、雲鵬ユインボンと弄玉夫人ノンユイに言った。

「旦那様、奥様！お二人もお引取り下さい。お仏間においでになって、お線香を捧げ、仏様の御慈悲におすがりなさるのがよいと思います！」

雲鵬ユインボンと弄玉夫人ノンユイは冬児トンアルの部屋から退り、ただ香綺シヤンチイだけが居残って手伝いをした。そして湯はどんどん運びこまれた。

間もなく香綺シヤンチイも部屋から出された。彼女は冬児トンアルの着物を脱がせるのと、病床のまわりに熱く沸かした湯が入っている大きな桶を並べるのを手伝わされた後、部屋から追い出されたのだった。

入口の戸は固く閉ざされた……………緊張と混乱の一夜であった。……………一晩中湯を沸かしては、部屋に運びこまれ、さめたものは部屋から出された。

誰にも室内の吟霜^{インシオアン}の行動は分らなかった。

ただ一人、侍婢の香綺^{シヤンチイ}は、小賢し気に言った。

「伝説によると、狐狸が修練を重ねて仙人になると、そのお腹の中に一粒の仙丹ができるんですって。もし人の生命を救う場合には、その仙丹を吐き出して、病人に飲ませると、それが効いて、病人は必ず助かるんです。でも仙丹を失って狐仙は、精気を失って、寿命が縮まったり、再び仙人に戻れなかったりするのです。それは一粒の仙丹を煉成するには千年以上もかかるからなんですって」

「出鱈目を言うものではない。！」と傍に居あわせた雲鵬^{ユインボン}は香綺^{シヤンチイ}を叱ったものの、彼までが……一体全体、吟霜^{インシオアン}は何をやっているのだろうか？……と疑ぐってもいた。

あけがた、やっとなん^{トンアル}の部屋の扉が開けられた。吟霜^{インシオアン}が戸口に現れた。皆が近寄って行った。

吟霜^{インシオアン}は戸口にもたれていた。顔は血の気が失せ、力は尽きて着物は濡れそぼれ、厳寒の季節にも拘わらず、彼女の額には汗がにじみ、濡れ乱れた髪の毛が一束額に垂れていた。見たところ、確かに香綺^{シヤンチイ}の言った様に精気を失っていた。戸口にもたれたそのかぼそい身体は、均衡を失ってふらつき、今にも倒れそうで、わずかにその額を力がぬけた細腕に委ねていた。

彼女は力なく口を開いた。

「神様。有難うございました。あの子はもう大丈夫でしょう」と言うなり、力尽きて、崩れるように倒れこんだ。そばに居た雲鵬^{ユインボン}は急いで彼女を抱き止めた。その疲れ果てて青白くやつれた顔を見ると、雲鵬^{ユインボン}はいじらしくてたまらず心が痛んだ。

抱きかかえて彼女の部屋に戻った雲鵬^{ユインボン}は、そっと吟霜^{インシオアン}を床に寝かせ、侍婢に側で看護するように言いつけ、また別の侍婢には急いで人参湯^{コシラ}を捧げる様に命じた。……果して仙丹を吐き出したかどうかもさることながら、ともかくこの様子では当分しっかり養生させなくては……と思った。

冬児^{トンアル}の室にもどってみると、室内は湯気が濛々と立ち籠め、部屋いっばいに濡れた手拭や、蒲団が置かれていたが、冬児^{トンアル}の着物や蒲団や敷布は既

に乾いたものに取り替えられていた。^{トナル}冬児は仰向けに寝かされ熟睡していた。熱は引き、呼吸もおさまって、顔色もよく、一切の病状が嘘の様に消えさっていた。

「あなたも、とうとう信じなくては、なくなりましたね！」^{ノンユイ}弄玉夫人は嬉しそうに^{ユインボン}雲鵬に話しかけた。

「何を信じるのかね？」

「それは、^{インシオアン}吟霜が恩返しに来た白狐であることですわ」

^{ユインボン}雲鵬の眉毛はピクリと動いたが、何も答えずに黙って部屋から出て行った。

その晩、^{インシオアン}吟霜は早くも元気を回復し、今までと同じように明るく潑刺とした姿で、^{ユインボン}雲鵬の前に現われた。彼女はにこにこ嬉しそうに言った。

「旦那様、おめでとうございます。これもひとえに、旦那様が日頃から功德を施していらっしゃった報いで、お嬢様がこんなにも早く回復なされたのでございます」

「そうかね？」

^{ユインボン}雲鵬は彼女を見すえていた。

「ほんとうの事をうち明けておくれ^{インシオアン}吟霜。そなたは仙丹を失ったのではないのかな？」

^{インシオアン}吟霜はそれを聞くと、思わずプーツと吹き出した。

「厭ですわ！旦那様。あなた様まで私が狐だと思ってらっしゃるなんて！私は皆さんにせがまれて、しかたなく冒険をしただけでございます。私の父は医薬の道に明るく、よく、よその子供さんをこの様にしてなおしたのを見たことがございます。ですから私は、^{トナル}冬児もきっとひどい風邪に見舞われたのだと思ったのです。だって触って見ますと、身体はやけつくようにあつく、熱は一向に引きません。ですから汗を沢山出せば熱はきっと下がると思ったのです。それで私は、見よう見真似で、沸かした熱湯を桶に入れて床の周囲にならべ、更に蒲団を蚊帳を引いたようにして、湯気がなかに籠るようにしました。思った通り^{トナル}冬児は熱気の中で汗を沢山出して熱がとれました。言ってみれば、なんとというほどの事もなかったのでご

ざいます。

「それなら、どうしてみんなを部屋から追い出したのかね？」

「だって、人が多いとかえって邪魔になりますし、それに私の治療法が一風変わっていますので、見られますと、むしろ疑がわれると思いましたが」

ユインボン雲鵬はじっと彼女に見入った。インシオアン吟霜は顔を赤らめ、視線をそらし、恥ずかしそうに囁いた。

「旦那様！あ……旦那様！どうなさいましたのですか？」

インシオアン「吟霜よ！」

ユインボン雲鵬は低く、ゆっくりとつぶやくように言った。

「そなたが大好きになったぞ！」と言い彼は頷きながら、さらに一言つけ加えた。

「それでな……お前に早く嫁入先を探してやらなくてはな！」と。――

(1975. 1. 16)